法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-26

社会学における方法論の考察 : G・ジムメル研究

KITAGAWA, Takayoshi / キタガワ, タカヨシ / 北川, 隆吉

(出版者 / Publisher)
法政大学社会学部学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
Society and labour / 社會勞働研究
(巻 / Volume)
14
(開始ページ / Start Page)
195
(終了ページ / End Page)
210
(発行年 / Year)
1962-03-20
(URL)
https://doi.org/10.15002/00017571

社会学における方法論の考察

——G・ジムメル研究——

北川隆吉

いづれの場合においても、一定の領域と方法論を有する科学のうちに、従来とことなった方向がうまれでるとき、それまでの研究への批判と学史あるいは学説史的な検討が前提とされるか、また附随してそれらがおこなわれる。批判の形式をとおしながら自己の新らたな主張が展開されることは、自己の論理構成を容易ならしめ確定させる上で便利であるだけでなく、一般的承認を得るために必要な技法でもある。基礎的であるという意味をふくめて、初歩的な段階としてこのことは認められなければならない。そして個々の研究者のすべてが、多かれ少なかれ、その研究の初期においてこの過程を辿らざるを得ない。形の上でそれがどのようにおこなわれるかは、もとより核心的問題ではない。現在のわが国の社会学の発展のなかで——拡大し、根源的にとらえるならば、一国の社会学にかぎらずこれまでの社会学のすべてをふくめて、社会学史が「書き改め」らるべき真の時期にさしかかっており、さらにそれをおこなう一つの力が、時と所のちがいをこえておこりながら正に一つのものに結合される状況に迫りつつある。それは一方でこれまで社会学を育ててきた社会体制とことなった地点での、新らしい展開でありそして他方では、同じ体制と学的伝統の内部から多様な形態で、しかもその根本において一致する方向でおこりつつ

ある。歴史と社会学の関係、史的唯物論と社会学の関係が、新らたなしかし他のいづれの時期よりも決定的意味をもってうかび上っている。そこでは、社会学そのもの、社会学理論一般が「イデオロギー批判」の対象としてのみとらえられる幼稚さは、克服されなくてはならぬし、克服されようとしている。

その際われわれにとって留意されなくてはならぬことは次の傾向であろう。その一つは、一定の思想、方法論を、それの主張者の基底的、社会的、存在的状況に環元し、思想、方法論がそこに解消せしめられ、思想、方法論の成立と実質と機能とが未分化のままに混同され、ときには意図的に縫合されることである。思想（史的）研究の方法ともかかわるが、華麗、明快な批判や把握のうちにひそむ、粗雑さと独断、それが結果する思想発展の抑圧と、死屍としてのこされる提起された問題への無関心は、もはや今日の段階ではゆるされまい。そして他の一つは、方法が方法としてのみとりあつかわれ、空疎な定式化——俗流化がなされる場合である。われわれにとって当面主要に問題となるのは、どちらかといえばこの場合である。無味乾燥な学説の常識的理解になぜ社会学では終始しなければならなかったかの問題として、またいくつかの提示された新鮮な問題の内容が、その「思想的」光栄を剝奪されなければならなかったか、社会学者自らによってなげすてられたそれらの事実に、新らしい視角から接近しなければなるまい。なぜならば、第一にあげた欠陥をうめるための努力としてそれが必要とされるばかりでなく、矮小化された常識の、無思想性の貧困さを救うことにもなるからである。思想(史)的につかむとは何にを意味しているであろうか。ここでは思想をただちにイデオロギーとは考えていない。社会、歴史、個人、文化などについて一定の全体像をえがきながらそれの本質に近づき、把握しようとする論理的体系の総体をここでは思想とよぼう。それは人間存在と社会あるいは歴史との出会いを常に問題とし、科学者であると同時に一個の人間としての科学者

の問題意識が鋭くうちだされる。他の社会科学の部門においてもそうであるが、「社会学」においてはそのことがまさに前提的要件とならざるをえないし、それを基本として方法論それ自体の刃を鋭利なものにする以外には何にもない。学説あるいは個々の研究者の検討が、このことをはなれたとき、そこにのこるのは、あしき抽象的思弁、机上での遊戯にひとしい解釈あるいは飜訳の手続きのみである。これまでわが国では、そのことだけをもってしても研究者たりうる条件はそなえられていた。またそのことこそが研究者たりうるための資格とさえされる逆転した評価が存在してきた。アカディアのすぐれた伝統は否定すべくもないが、同時に正統的研究のさまたげられたわが国の社会学研究（者）の弱点もつかれなくてはなるまい。学問研究の上では豊饒な緑野も、一瞬に灰色の荒野と化し、常識が常識でなくなることがありうる。たしかに社会科学は、科学として「科学化」の途をあゆまなければならぬ。科学化の途は如何にして社会学という領域において到達されるか、その時何にが前提とされなくてはならないか。これらのことに、G・ジムメルは、身をけづりながらとりくんだ社会学者の一人といってよい。正統的、社会学研究、方法論的考察の前段として、以下にジムメルを素材に検討を行なってみよう。

「ジムメルは、個々の点に於ける彼の思索は甚だ深く、彼の精神的弁別力は非凡であり、諸々の思想を結びつけまた引き離す彼の手際は殆んど魔術的であるが、而も、確かに、大思想家と云わるべき型には属しなかった。そのためには、彼は、世界の全体をば一の形象に形づくり得るような大なる直観の力を欠いていた。蓋し、彼の生の形面上学は、体験せられない世界の全体をば生の偶然的な且つ説明せられ得ない質料として拋棄するが故に、そのた

めには、本来適していなかったのである。而して、彼自身も、かつて自分を大哲学の末裔の中に数えているのである。尤も、彼は、そのことをば、弱みと考えてはいないのみならず却って特権と考えている。即ち、彼の思索には完成せる体系が持つ一面の偉大さは欠けているが、その代りに、偉大の一面が存すると考えているのである」（「ジムメルが精神史に対して持つ意義」M・アドラー、五十嵐信訳「思想」五十一号大正十五年一月号）

ゲオルグ・ジムメル Georg Simmel（一八五八～一九一九）について、マルクス主義の立場にたつ研究者マックス・アドラーは、右のごとき論評をおこないつつ、それをおわるにあたって、次の詩的なリズムをもった言葉をくりひろげる。

「彼（ジムメル）の著作は、その魅惑に身を委ねる凡その者に対して、屢々、裸かなる生に対して反対する理性にとっては到達せられ得ぬところの而も凡ての者がその忘れ故郷に帰る心地して沈潜するところの我々の実有の奥底から来る、燈火の如くに、声の如くに、働く。而して彼の個々の論述には、いかに多くの誤謬や欠陥が存在していようとも――私はここで故意に凡ての批評を控えて来たが――而も、全体として見れば、我々は、彼の思索の様式の中に、我々を最も深く動かしているもの、即ち我々自身の生をば表現するところの新しい言葉を見出すであろう。かかる言葉をかくも驚くべく駆使し得た国は、今や永久に閉されてしまった。併し、それは、なお、この思索家の著書から、多くの世代に響き、新しい開扉の呪文の如くに閉されし心の宝庫を開き、永き黙せる絃を振わし鳴らすであろう。かくて、ジムメルの哲学は、全き自己認識を獲得するための斗いに於いて、新しい真理の啓示者としてよりは寧ろ人間の精神の形成者として、永く働き続ける力であるだろう。」

形式社会学の定礎者としてのジムメル、それはフィーアカント、v・ウィーゼ、の Formale Sozislogie の名と

ともに知られ、コント A. Comte の綜合社会学のアンチ・テーゼの提出者として、安易な社会学史上における弁証法的展開の一点をなすものとしてとらえられている彼について、かくも人間的響きと深さをもって語られた事実をわれわれの手近かにある研究書は、正しくつたえてはくれぬ。

因みにいくらかをあげておけば、阿閉、内藤「社会学史」、尾高邦雄「社会学の本質を課題」（上）、安西文夫「社会学史概説」新明正道「社会学史概説」などがあるが、その一つ一つにここでふれることはできないが、あえてM・アドラーの理解を前提として斥ぞけるとしても、全体として尚それをふまえての論述とはみられない。林恵海「ジムメル社会学方法論の研究」（大正十五年甲子社）井森隆平「形式社会学研究」（昭和二年甲子社）新明正道「形式社会学論」（昭和三年巌松堂）などにおいても事態はほとんどかわりない。たゞ断片的にではあるが清水幾太郎、日高太郎の論稿及び細野武男「社会学」（昭和二十四年法律文化社）の「ジムメル」においては事情はことなっている。

ジムメルについては、哲学の領域で（例えば谷川徹三など）の研究が存在し、精密な評伝的研究としては、スパイクマン、Spykman; Social Theory of Georg Simmel 一九二五年があり、近年ではヴォルフ、パッペンハイム、ミルズ、阿閉吉男などの従来とことなった観点からのジムメル研究がすゝめられている。

尚ジムメルの著作については、林恵海「ジムメル社会学方法論の研究」、及び清水幾太郎「断想」（岩波文庫）巻末の文献目録を参照されたい。邦訳のある代表的で、社会学と関連のあるものをあげておけば、

「社会的分化論」（五十嵐信訳岩波書店）、「歴史哲学の諸問題」（樺俊雄訳三笠書房）「貨幣の哲学」（堀井実訳斯文書院、傍島省三訳日本評論社）「文化の哲学」（阿閉吉男訳三笠書房）「社会学の根本問題」（堀真琴訳内外社、学苑社、小田秀人訳大林書店）「断想」（清水幾太郎訳岩波文庫）

がある。

ほゞこれまでのジムメル研究の一致した見解によれば、ジムメルの研究経過、問題関心の移動は

㈠ カントを中心とした哲学的、歴史哲学的研究の時期

㈡ 「社会的分化論」以後「社会学」にいたる社会学的研究の時期

㈢ 「生」の哲学の研究の時期

に三分される。死の直前再びジムメルは、「社会学の根本問題」をあらわすが、それは社会学への回帰ではなく、一応の決算とみられる。伝記については、スパイクマン、細野、及び福武、日高、高橋編「社会学辞典」などを参照されたい。

本稿では、以上のごとき事実を前提として検討をすゝめるので、くわしい解説は最小限にとゞめたい。社会学の全体的ながれをつかむためには、ユニークな研究として、本田喜代治「社会学入門」（培風館）をあげておこう。

長い持続的な研究に終始した偉大な思想家や、社会科学者が、その初期と後期において取り扱うテーマをかえている例は決して少なくない。むしろ例外なく関心、対象領域の移動がみられると云ってよい。このことから、一人の研究者についての様々の解釈が、年代史的におこなわれ評価が分散する。けれども、すぐれた研究者が、すぐれているとよばれうる栄誉の基礎は、その多彩、且つ広汎な関心領域の故ではなく、自己の設定した主題にむかっての接近を、自己の資質と固有の方法によってたゆみなくつづけ、自己を拡大し他のいかなるものもかりることなく自らの仕方において深化させることによって与えられる。自らの主題に対する継続的解明の努力と、自己をそれにむかってかりたててゆく内発的緊張が、研究生活のすべてを一貫して蔽い、正にとらわれることのない多元的で多様な視角からの考究及び研究成果が彼を偉大にさせうるのである。この独自的な知的創造の営みが、その極点にまでたかめられるとき特殊領域をこえて、社会科学全般が共有しうる一定の「思想」「科学方法論」形成の途がひらかれる。所与の特殊領域にのみ閉塞し、時代的制約を正しくうめとめた地点から提起され定着する内的な（精神的（ガイステッヒ）に）主題ではなく、その状況に支配された一見かがやかしいが表層的、外的な問題関心と、便宜的な関心の移動からは、躍動する科学的労作や思想は、多くの場合うまれ得ない。もとより、自己の主題の追求を特殊領域内に限定して専門的、独自的に研究がつづけられることと、さきにのべたことはなんら矛盾するものではない。主題への接近の手法が、例えば社会学的であるかないかに拘泥して、主題のもつ意味の重さを見失う傾向は、自らをせばめ貧

困化せしめる自己縮小的精神のあらわれであり、この際「科学化」が建前としてうちだされるとき、それは一方では現実遊離のみじめな抽象化の方向へ、他方では現象羅列のディレッタンティズムの方向への両極へ分解させる。問題は、主題が何であるか、もしいうとすればそれが社会学的であるかないかこそが問わるべきであり、それをときうる方法としての社会学的方法が問題とされなくてはならぬ。生来その研究者が、宿命的にある領域の研究者でなければならず、ある方法論を必ず用いなくてはならぬといういわれはどこにも存在しない。

ジムメルにおいては、断片的な不統一のままの論考は、それ自体としての完結性と鋭どさを有し乍ら、学的体系としての全体的統一にはいたっていない。社会学的研究も、「社会的分化論」から大著「社会学」Soziologie, Untersuchungen über die Formen der Vergesellshaftung の上梓にいたって中断され、晩年それは体系化への志向が働らくが内容的には平板化される。カント、ショウペンハウエル、ニイチェ、レンブラント、ゲーテに関する論述、後期をいろどった「生」の哲学への傾斜と、所謂形式社会学との関係、連続は一体どこにあるのか。あきらかに判明することは、彼にとって「社会学」そのものの樹立が問題だったのではないようである。こうした場合に、彼が提示した社会化「形式」を、「心的相互作用」のみをぬきだし、社会の本質規定としてのみとらえ、社会学方法論として定着せしめることにどれほどの意味が存在するだろうか。ましてや、Formen あるいは Formale のみをぬきだし、その類型化に終始し、遊戯的ともいえる操作をくりかえして統一性をもたらそうとしたその後の形式社会学者と同列にあつかい、矮小化された展開を、形式社会学の発展と考え、またこれに批判をあびせるのは、余りにも安易であり、事態の不用意な単純化であるといわなくてはならない。――もとより、たとえばv・ウィーゼにみられる社会形像、社会関係についての尨大な論究の全面否定をいっているのでもなく、社会学が社会型態に

関する研究の科学として展開しうる思弁的側面が深化されている意義を無視しようとするのでもない。かえってこの点についての、あたらしい視角からの接近の緒をもとめる(あるいはもとめるべきだと考え)必要があると考え、それにむかっての前提的考察を行なおうとしているのである。――

「あらゆる学の総体を一つの壺に投じて、その壺に―「社会学」と貼紙した所でそれによって何ものも得る所はないであろう。」(社会学の根本問題)この有名であるだけに出生不明におちいっている言葉がふくんでいるものを、社会学そのものの体系化の作業の線上でのみとらえることがこれまでつづけられてきた。しかも社会学という曖昧なそれだけに広域な枠の上で。そして、綜合社会学と形式社会学の成立と相違の原因を、前者を社会的視角から、後者をそれのうちに社会的要因をふくむがドイツ的学的状況(哲学優位の)の故をもって説明してきた。だが、両者はその対比の平面がづれている。前者コントについていえば、フランスにおける学的系譜のなかで位置づけ、とくにその師サンシモンひろくは百科辞典派との関連が、後者についていえばドイツ市民社会の形成期(ヨーロッパにおける後進市民社会の内容)とのかかわりあいが脱落している。

十九世紀についての、基本的認識の欠如がここには見られる。カント、ヘーゲル、デイルタイそしてジムメルの関係も、一般的学的状況の説明はあっても、細かくはとらえられていない。それらを一応おくとして、また社会学論という限局した枠組の同一線上での系列的把握としてみることも黙看するとしても、両者の主題の根抵的基礎の相違については、これを放置することはできない。言語学的考証からだけではなく、主著「社会学」においても、それにもまして、若しくして逝いた訳者五十嵐信が訳書の序言にしるしたように、デュルケームの「社会的分業論」De la division du travail Social, étude sur lóriganisation des sociétés supérièures 1893 とならんでジ

ムメルの名著であり、彼を知る上での基本的著作とされる「社会的分化論」Über sociale Differenzierung, Sosiologicshe und phychologishe Untersuchungen 1890 においても、ジムメルをとらえている主題は、主体としての個人の側から、歴史、社会、文化との結節がいかになされうるか、その「社会化の過程」をとりあつかって、人間の「生」の本態がいかなるものであるかを追求することにあった。

それは初期においてカントの主知主義的観点からこころみられ、次いで社会の人間のおりなす相互作用、相互依存、相互限定、相互侵害、相互強化の過程が「生」にあたえる広汎な内容的意味を、形式と内容を分離しつつ、その中軸に存在してうごかぬ人間社会的なるものへの解明にむけていくことによって果そうとした。そして最後に彼は、外枠としての社会をこえて、内在化し超越的にとらえられる知性の主体としての、しかも激動してやまぬ激情の主体、すなわち「生」そのものへの直観的認識へ傾斜する。かくて、フランスの哲学者、アンリ・ベルグソンとの真に「人間的対話」が成立するのである（アンリ・ベルグソン一九一四年ジムメル、斉藤栄治訳「芸術哲学」岩波文庫所収、日高六郎　ベルグソンとデモクラシーの心理学「現代イデオロギー」所収参照）。かかる個に主軸をすえた思考は、あきらかにコントにおけるそれとは異質のものである。そこに存在する社会、歴史にいどみかかり、個をして、その運動の担い手たらしめようとする発想と、流動するながれとしての歴史と社会のうちに機能し、しかもその奥底において個の実在をさぐろうとする発想は「社会」の一点において結節し乍ら、しかも尚そのへだたりは消し難くよこたわっている。統合と分化、分化の伸展を現代的様相とみたジムメルが、安易な二分法や発展段階論におちいることのなかった秘密は正にそのへだたりの故にあると考えられる。ジムメルにとっては、社会的分化は、時代の止むを得ざるながれであり、その所与の社会的外枠のなかで、人間の生の実相が如何に展開さ

れるのかこそが、問題とされていたのである。その社会的外枠の把握は、特殊ドイツ的であったと同時に、なをそれをこえており、他の現代社会解明の著作がほとんど同時期に噴出しているように「現代社会」への接近の先進的労作であり、デュルケームとならんで、コント的段階における内容とは異質の性格をもっている。また他方でそれはすでに萌芽的状況にあり、その後をおおうブルジョア思想、科学方法論の代表者としての、プラグマライズム——分析哲学と実存哲学との対抗関係のなかでとらえられなくてはならぬ側面をもっている。「科学主義」への傾斜をしめす社会科学にたいして、「科学的」の名において「精密さ」の故に、掌にすくった水のごとくにこぼれおちて行く「生」について、「歴史」について、ジムメルはそれをおいもとめる。超歴史的、超現実的にみえながら、実はもっともすぐれて現代的課題にこたえようとする仕方においてである。そのかぎりで、われわれにとってジムメルの社会学は問題たりうるのである。「社会的分化論」と「貨幣の哲学」がその具体的あらわれとして注目される。

シュパン、フライヤーをはじめとする人々によって、ジムメルの思弁性が、その抽象性が、そしてまた非歴史性や心理学的方法が批判され、克服されおわったかにみえる。たしかにその指摘は正しい。だがそれはジムメルを完全に克服してはいない。ドイツ・ナチズムが国家、民族、階級の問題について、それなりに一時的に解決したことを承認するとしても、ふたたび、三度よみがえってくる現代社会と個人の関係について、ついに抜本的解決はなく、現在では、シュパン、フライヤーは前景から遠のき、形をかえて、ジムメル、ウェーバー、パレート、デュルケームが、あるいはテンニースが、アメリカ社会学の衣粧の中にくるまってわれわれの前にたちあらわれるのはなぜか。進歩と反動の機軸でとらえられるものは容易に判別しうる。しかし、そのいづれでもなく、思考そのものが生であり、生涯が独創的思考であるその強靭さと、そこによこたわる「人間」存在についてのたえることのない関

心は、安価なさきの機軸の埒外にある。また、ヴィルヘルム体制下のドイツの思想として、その史的位置づけとデイルタイとの関連の解明をおこないその著者の十数頁をさいたルカーチ（Die Zerstörung der Vernuft 1953）の把握の方法も、すぐれて正しい。だが、それでもルカーチの筆勢は、かならずしも冴えてはいない。数多くの人々からなげかけられている批判は、そのいづれをもとることができる。そして、基本的には、観念論的立場と、階級についての本源的解明の欠如が、所謂ブルジョア社会学の範疇に彼をくみいれることを可能にし、その故に真の社会学的方法論樹立の方向から、彼が脱落せざるを得なかったことは断じて言っておかなければならぬ。しかし、それにもまして重要なことは科学方法論、認識論としての基礎的意味においてであれ、あるいは人生観、世界観樹立の基礎の意味においてであれ、「哲学」が哲学として存在しうるための核心的部分に目をむけ、その可能性を極点にまでもとめようとした、その故に哲学的社会学としての途を辿らざるを得なかった彼の方法が、ついに主著「社会学」をもって挫折せざるを得なかったことである

研究者、思想家の言葉が、抽象的にのべられているからといって、また歴史的事象の片々がそこにふれられていないからといって、それが思弁的であり、非現実的であり、また逆に個々の認象がのべられ、数的に処置されているからそれが「社会」学であり、科学的であるとみるのは、ともにその理解の浅薄さをしめしている。現実へのトータルな把握を失った個々の現象の分析や、人間存在についてのふかい省察を欠いた社会と個人、集団と個人との関係への接近が如何に空疎であるかは、あらためて云うまでもあるまい。平均化された集団の意識が、現実を正しくつたえているわけはない。真の意味での歴史とのかかわりあいも失った研究者が、歴史とかかわっている個々人の何を問題とすることができるであろうか。個人のうちにおこる内面的葛藤の、その発現の場としての社会をこ

そ、そしてそれとのかかわりあいこそが、社会学において問題とされ、ジムメルののべる「機能」「作用」がとりあげられてくるのである。社会の自然史的展開と、社会にいきる個人のそれへの主体的参加の媒介はなにかが、現代的相貌のなかで現在問われつつあり、そこには「人間論」「人性論」の再検討がうかび上ってきている。ジムメルはそれを、西欧的知性伝統の上にたって、主知主義的あるいは心理学的にとりあつかい、個の内面へ内面へと転移させていった。そこではつかみうることのきわめて不可能な迷路がまちうけ、孤独な魂を、自らの内燃作用によってあたためつづける途しかのこされていなかった。偉大な魂は、多くの場合そうであるが、ついに真友ベルグソンとも訣別し、耐えることによってのみ自己をまもりつつ寂しい生涯を閉じざるを得なかったのである。このことを「悲劇」とよぶべきか、そして「理性の崩壊」とよぶべきか、まさしくその通りであり、ここにブルジョア的思考の終末にちかい輝やきをみることができる。

このことを、ジムメルのみに限局して論じることは問題をせばめている。他のいく人かのすぐれた社会学者たちについても、あらためてそのあらわれの異同をあきらかにすることで論究されなくてはならぬ。それはマルクス主義に対して、だれがどれだけ近く、だれがどれほど遠いかといった単純な尺度によってはかられるものではない。思想を思想として独自的に扱い、一回で問題がたちきれることのない論議の発展、展開のためにも必要なことなのである。ただジムメルに限っていえば、それがすぐれて純粋な形態とするどさをとってあらわれていることが問題なのである。十九世紀から二十世紀へのうつりゆきを、すくなくとも社会学にのみかぎってみるとき、次に生起するアメリカ社会学の傾向との断絶を示す典型的な一人として定着させることができるのである。それを古典的社会学となづけ、後者を現代社会学となづけるとすれば、古典的社会学の終焉をいろどる一人として、そして全くその立

つ地点をことにし、形をかえ乍らもコントと共に古典的社会学方法論の提示者の一人としてあげることができる。それは、同時に一定の社会思想史的位置をもあたえられるものである。コントのそれが、社会体制への距離と関心をつよめているのに対して、ジムメルのそれが超歴史的にみえるがゆえに、体制をこえ進歩と反動の刃でつききれない鍵は、イデーの普遍化への思考の強さによっていた。それ以後の社会では、これをふたたびコント的方向ですすめたものは、全体主義的社会学へ、そしてそれを拠棄したものはアメリカ的科学的社会学への分解をみせる。現代のブルジョア社会学は、社会科学のレベルとしては、この両極へ、しかもその両極は、世界史の現代的段階においては一致し、それと対立するマルクス主義社会学との緊張関係におかれざるをえないし、そのように変質している。グラムシの云うように、今日のすべてのブルジョア科学は、なんらかの形でマルクス主義とかかわっている。そのことがますます鮮明となり、ぬきがたくなってゆく過程の、その境い目にジムメルは位置しているといってよい。それ故、個は、ジムメル以後においては、所与の条件のもとに緊縛されたものとしてとらえられ、自由な知性の担い手としての個は、もはや社会学の前面からしりぞく。社会体制、機構の物神化から問題がときおこされ、わづかにのこされた余地を確保するものとして、「閉じた魂」内部の活動が問題にされるにすぎない。

豊かな西欧的知性の伝統は、いまわづかな部分でアメリカでも復元されようとしているが、その大部分は社会学の内部から放逐されるか、されようとしている。しかし事態は、正に人間存在そのものについて、歴史、文化について未来を予知しうる科学的思想的解明をわれわれに迫っている。このことにこたえうる途はどこにあるかこそが、新しい課題となってたちあらわれている。ここでわれわれがジムメルに学びうるものは、その方法論と個々に限局された思考では到底ありえない。それは思考の過程であり、彼がとりあつかった主題の意味である。かつてユ

ダア系という偶然的出生の負い目の故に、社会的にも不幸な一生を終ったジムメルは、とくにわが国の社会学史上で、その解釈者の俗流化の故に、研究者としてもまたうるおいのない非生産的な学者としての不幸をおわされてきた。だからといってわれわれは、ここにジムメルの栄誉恢復をはかろうとするのではないし、それを必要とするいわれはどこにも存在しない。しかし、あやまった学史はかきあらためなければならないし、彼のもった方法上における原理復数主義——→相対主義の根源がいづこにあったかも、社会史的、社会思想的に問いただされることはなされなくてはならないと考える。彼が初期にいだこうとした楽天主義は、その後期においてドイツ社会の変化のなかからあえなくくずれおち、自己を悲劇的存在として、その中で考えつづけることによって生きつづけた。このジムメルにおける「生」の強さ、ジムメルがジムメルでありえて、他のいかなる人間でもありえない人間としての独自性が、正しく発現しうる場と方法はどのようにしてもとめられうるかにわれわれの課題はかかっていることでもある。現実社会への働らきかけへのたえざる誘惑と斗いながら、それを自己のうちに沈めつつ学的研究にたづさわった、ウェーバーにもみられるその思考のあり方そのものについても、またわれわれの思考のメスはむけられなくてはならぬであろう。科学的研究にたづさわるものの、基本的存在形態との関連において。

形式社会学者として高名であったジムメルを、図式的理解にとどめることの愚かさは、他の社会学者についてもなされなかったとだれが保証し得るであろうか。その研究者のもっとも実りすくない部分をとらえ、あるいは実りすくなくとらえようとする傾向が存在するかぎり、時勢迎合的な衣粧替えがおこなわれるにすぎない。いかに見事

な様々の衣粧が社会学をおおったとしても、その底にジムメルがもっとも尊重し、マルクスが不抜のものとして内在化させた〝真の科学的精神〟が欠如するかぎり、真の方法論討議も、論戦もうみだされはすまい。同時に、またそれは、その理論が正しいが故に空疎な、真の意味での正しさをもちえない公式主義がのこり、創造的発展はうみだされはすまい。

ジムメルが半世紀前に提起した近代的分化、現代的分化的思索、それは、実体としての機能分化の状況を前提としているが、そのなかで全体を統一的に把握し、有機体のうちにおける生の通過点としての個が、歴史との真のかかわりあいをもちうる途はどこに存在するか。それを現代的自己疎外における克服の途とよぶ仕方が現在では一般化している。現代の社会学は、形態的、実態的分析を――それを経済学政治学その他の諸科学との協業の上に成立させながら――、しかもこれにつけくわえて、社会とは何か、個人と社会の関係はなにかの視角からとりあげ解明しなければならぬ。それを、マルクスとことなった方法によって、しかもマルクスがのこした問題――あるいは集中的にはとりあげないでおわった問題について、ジムメルは迫ろうとした。マルクスもまたゲーテについて、ギリシャ美術について論究している。それのもつ意味を、発展的にとらえることが、のこされているということでもある。それは芸術について、文学についてただちに論じようとすることにはならない。そうではなくて、核心的に存在する社会、歴史、個人、及びそれらの関係、相互規定性について、根源的に追究することなのである。

最後にジムメルの言葉をもって、この小稿を閉じよう。

「哲学者には三つの範疇がある。先づ第一に人々は物の心臓の鼓動を聴き、次の人々は人間の鼓動のみを聴き、そして第三の人々は概念の心臓の鼓動のみを聴く、さて（哲学の教授達が属する）第四番目の範疇は文献の心臓

の鼓動しか聴かない人達である。」

「『余の味方にあらざるものは余の敵なり』――これは私の考え方からすれば正に半面の真理しか伝えぬものである。私が生命を献げている究極的問題に対して味方でもなく敵でもないような無関心な人だけが私の敵である。併し積極的な意味で私の敵である人、私がそこに生きている平面に入って来てその内部で私と斗っている人、この人こそ最高の意味に於いて私の味方である」（「断想」より）

本稿は、社会学史、社会学論を再検討、考究する前提的考察として、提出したものである。今後、個別の社会学者をとりあつかう方向をふくみながら継続的な研究によって、本来的課題に近づきたい。それ故こゝでは学史の全体的展望と積極的な意味での学論の内容は意図的にふれることをさけることになったので附記しておく。